

17) Angiotensin II を用いた癌昇圧化学療法 が奏効した進行胃癌の1例

山田 聡志・加藤 俊幸
村井 政子・松村 修志
船越 和博・秋山 修宏 (県立がんセンター)
斎藤 征史・小越 和栄 (新潟病院内科)

症例は56歳女性。平成6年春の検診にて貧血を指摘された。近医の胃透視にて胃癌が疑われたため7月29日に当科に紹介され、内視鏡、CTによって進行胃癌(2型, H2, N4)と診断された。入院時には黄疸がみられ、TB 7.6 mg/dl, ALP 707 IU/l, CEA 84.6 ng/mlであった。切除不能のため Angiotensin II を持続静注する癌昇圧化学療法を施行した。目標の中間血圧は140~150 mmHgに設定し、5FU, MMC, ADR を静注した。第1クール終了時にはCEAは55.1 ng/mlと減少し黄疸も消失した。2回目施行後には原発巣も平坦化し、胃生検でも癌陰性となり(PR), リンパ節転移巣の縮小(PR), 肝転移巣の消失(CR)も認められた。第3クール終了時にはCEA 8.5 ng/mlまで下降し、画像上もPRが持続した。その後も同療法を繰り返し現在第5クール施行中である。副作用としては施行中の一過性の頭痛、施行後の白血球減少などが見られた。

18) 切除不能胃癌に対する CDDP-5FU 療法, MTX-5FU 療法の検討

太田 宏信・高橋 澄雄
武田 康男・石川 直樹
吉田 俊明・本間 明 (済生会新潟第二
上村 朝輝 病院消化器内科)
武田 敬子 (同 放射線科)
石原 法子 (同 病理検査科)
石川 達・瀧本 光弘
松井 茂 (新潟大学第三内科)

【目的】当院での化学療法の成績を検討し、QOLを損なわない投与方法を確立する。【対象】切除不能進行胃癌21例にCDDP-5FU療法、25例にMTX-5FU療法を行った。(うち10例は両者を異時性に併用。またMTX-5FU療法は未分化癌のみに施行)【方法】CDDP-5FU療法:CDDP 100 mg/bodyを初日のみ。5FU 750 mg/bodyを5日間。原則的に1カ月に1クール。MTX-5FU療法:MTX 100 mg/body, 5FU 750 mg/bodyを1日。原則的に1~2週に1クール。【結果】CDDP-5FU療法:PRは21例中3例(奏効率14.3%)自覚症状の改善が得られたもの8例(38.1%)。MTX-5FU療法:PRは25例中6例(奏効率24%)自覚症状の改善が得られたもの14例(56%)。副作用は主に5FUによる消化

器症状で、これを長時間緩徐に点滴するか、経口剤に代えることにより防げるものと思われた。

19) 肝転移が化学療法後消失し、術後8年後に 残胃癌が切除しえた膵癌の1例

相場 恒男・加藤 俊幸
松村 修志・秋山 修宏 (県立がんセンター)
斎藤 征史・小越 和栄 (新潟病院内科)
土屋 嘉昭・梨本 篤
佐々木寿英 (同 外科)

症例は65才男性。'87年2月幽門狭窄により膵頭部癌(8 cm, S3, Stage IV)が発見され、膵頭十二指腸切除術を受け、絶対的治癒切除であった。'88年1月CA19-9 120以上に増加し、肝転移(S₆)が発見され、肝動注とTAEを受けた。治療後CA19-9の下降とともに転移巣は消失した。'91年8月再び肝再発(S₈)認めたが動注し、消失した。その後、経過良好であったが、'94年12月残胃癌(2型, mp)が発見され脾胃全摘を施行。開腹時、空腸腸間膜に平滑筋肉腫も発見され切除された。膵癌が切除後8年間生存中で、肝転移が化学療法により消失し、この度残胃癌と小腸腸間膜肉腫も切除された3重複癌の1例である。

20) 肝動注化学療法後に再肝切除が可能であ った胃癌肝転移の1例

新国 恵也・竹石 利之
加藤 英雄・吉川 時弘 (厚生連長岡中央
佐々木公一 総合病院外科)

症例は61歳男性。幽門狭窄を呈し横行結腸に浸潤した胃癌に対して、平成3年8月8日胃全摘兼脾合併切除術・横行結腸部分切除術を施行した。病理組織診断は tub2, sei (colon), n1(+), ly1, v1であった。術後12カ月目に出現した肝転移(S3)に対し肝外側区域切除を施行した。さらに肝切除6カ月目にS7(φ3 cm)とS5(φ3 cm)に計2個の残肝再発を来したが、切除は困難であり大腿動脈経路でリザーバー肝動注化学療法を行った。薬剤は5-FUをベースにMMC, THP-ADR, CDDP, LVを適宜使用し、週1回の割合でone shotで注入した。肝動注開始16カ月後のCTで、腫瘍は完全消失しCRと判断した。CA19-9も1,270 U/mlから21.3 U/mlに低下した。しかしその2カ月後、肝動注 tubeが閉塞した時期に一致してCA19-9が332 U/mlと上昇し、S5に腫瘍が再出現した。その後4カ月間経過観察したがS5以外に転移巣は出現しないため、肝部分